

もういちど

く 蛙飛びこむ水の音く

作・小佐部明広

【登場人物】

ブイ …………… 片田舎の少年。
カモメ …………… ブイの幼馴染。
ヒト …………… ブイの幼馴染。
エリ …………… ブイの妹。
村長 …………… ブイが住んでいた村の村長。
高浜 …………… 町内会長。
河東 …………… 町内会会計。
コザキ …………… ミュージシャン。
シマコ …………… コザキの妻。
三島 …………… 学者。
川端 …………… 三島の助手。
タミオ …………… ブイの大学の同期。
新人
記者
ハナ
塾生たち
学者たち

第一幕

●シーン1

西暦二〇〇〇年頃。廃墟。

歴史学者の三島と、助手の川端が現れる。

川端は建物のいろんなどころを見て回る。

川端 へえー。

三島 なるべく手を加えないようにしているんだ。世界遺産に登録しようという動きもあるみたいだ。

川端 (それらしい場所に立って) この辺で演説してたんですね。

三島 今から約80年前、2019年に、この俳句塾を拠点に悪夢が始まった。

川端 今はこんな平和なのに。

三島 数年後にどうなっているかはわからない。

川端 たった80年前。

三島 川端くん、キミのひいおばあちゃんはここの出身だったわけ。川端 みたいです。

三島 実は私のひいおじいちゃんつまり曾祖父もここの出身だったらしい。しかも、川端という助手がいたそう。

川端 偶然。

三島 今と同じように、キミの曾祖母は、私の曾祖父の助手をしていたかもしれない。

川端 それすごいですね。(何か発見する) あれ？

三島 なんだ？

川端 なんででしょう？ なにか原稿みたい。

三島 日記みたいだ。

川端 (原稿の文字を指して) 名前。

三島 三島ツチオ。私の曾祖父と同じ名だ。

川端 これもしかして。

三島 (何枚もめくって) 間違いなさそう。あの時代、曾祖父が書いていた日記。

川端 アンネさながら。

三島 あの時代を知る大事な資料になるかもしれない。

川端 確実ですよ。

三島 2019年8月、内戦終結の1年前で終わってる。

川端 残りは紛失したか、

三島 あるいは書けなくなった。(原稿のはじめに戻る) 日記のはじめは、ある小説を発見したところから始まっている。「私はある小説を発見した。俳句を散りばめた一大叙事詩。第一章には幼い頃に出会った満天の星空や、遠い世界への旅立ちが印象深く書か

れている。」(違うページを見る) 「2018年5月1日、もしかすると私は歴史が動き出しているところを目の当たりにしているのかもしれない。助手の川端……、

川端 間違いなさそうですね。

三島 助手の川端を、偵察に行かせることにする。」

川端 偵察？

三島 「心を落ち着けて、行く末を見守ろう。
古池や 蛙飛びこむ 水の音」

二〇一八年、片田舎の俳句塾。

座禅しながら話をきく塾生たち。

塾長のエリと、副塾長のヒト、町内会長の高浜、会計の河東が塾生たちに向かっている。

エリ 古池や 蛙飛びこむ 水の音

みなさん、この句をどのように解釈しますか？

塾生たちはこそこそ話したり様子を伺う。

エリ 質問が難しいですね。ではこの句から何を感じますか？

その中のひとりがしゃべりだす。

塾生 1 静けさですか。

エリ いいですね。ではさきほどの句をもう一度読んでみてください。いい。

塾生 1 古池や 蛙飛びこむ 水の音

エリ この句に静けさという言葉は出てきません。ですが私たちの心には確かに静けさを感じることができます。これは私たちが言葉の意味を解釈することによります。俳句というのはこの解釈の美しさを追い求めるものなんです。

塾生たち感心する。

エリ この句はある日、芭蕉が蛙が水に飛びこむ音をきいたときに思いついたそうです。そこで「蛙飛びこむ水の音」、もとは「蛙飛んだる水の音」だったそうですが、そこまではすぐに決まりました。しかし上五、つまり最初の五文字をどうしようか悩んだそうです。そこで芭蕉は弟子たちと相談し、最終的に「古池や」に決定しました。

塾生 1 じゃあ、古池は実際にはなかったということですか。

エリ そう。「蛙飛びこむ水の音」は現実の世界。「古池や」は現実ではない世界。これを組み合わせるひとつの句にしてしまったところに、芭蕉の素晴らしさがあるわけですね。

塾生たち感心する。

ヒト それではもう一度、芭蕉の教えをおさらいしましょう！

塾生たち はい！

ヒト 芭蕉の教え！

塾生たち 芭蕉の教え！

ヒト ひとつ、俳聖・芭蕉、およびその子孫を尊ぶべし。

塾生たち ひとつ、俳聖・芭蕉、およびその子孫を尊ぶべし。

ヒト ひとつ、松のことは松に習え、すなわち個人的な観念を捨て対象と一体化せよ。

塾生たち ひとつ、松のことは松に習え、すなわち個人的な観念を捨て対象と一体化せよ。

ヒト ひとつ、意見が分かれる場合は民主的な方法により決定せよ。塾生たち ひとつ、意見が分かれる場合は民主的な方法により決定

せよ。

ヒト よろしい。それでは最後に芭蕉の子孫、松尾エリ塾長のお言葉をいただきます。

塾生たち、拍手。

エリ みなさん、私は大変な不安を持っています。ご存知のとおり、先の世界恐慌により、世間はリストラの嵐、就職には氷河期が訪れ、社会の格差は広がるばかり。これは金が欲しい、権力がほしいという個人主義が押し進められた結果です。きつとあと数年で、資本主義という名の個人主義は崩壊するでしょう。私たちは個人主義の中に幸せを追求してはいけません。松のことは松に習え、個人の欲を捨て、自然の中に埋没する。そしてそれこそが俳句を読むということなのです。本日はお疲れ様でした。

塾生たち拍手。

ヒト それでは体験入学会を終了いたします。

河東 本入学をしたい方はこちらに入学申込書を提出してください。

塾生たちは申込書を提出し去っていく。

川端 あの！

河東 おお、川端のみつちゃんねが。

川端 おらも入っついていいですが？

河東 おお、へえれへえれ。その紙提出して。あとで連絡するがら。
川端 ありがとうございます！

川端は申込書を提出して去っていく。

ヒト うんうん、今日も立派だったなエリ。

エリ はあ、間違えずに言えた。

ヒト 標準語も板についてきだんでねが。

エリ そうがなあ。

河東 みなさん、これで塾生が1000人突破しだすよ！

エリ 本当？ すごいなあ！

村長が現れる。

村長 やあみんな、ご機嫌いかが。

河東 ああ村長、お疲れ様す。

高浜 お疲れ様す。

村長 おう町内会長アンド町内会会計。

河東 兼、俳句塾会計す。

高浜 偉えご機嫌すな。

村長 なんだ。重大ニュースがあつてな。

河東 なんす重大ニュースて？

村長 ござ住み着ぐ人が増えだおかげで、我が村も「市町村」の「村」から「町」に格上げになることが決まった。

高浜 というごどは。

村長 おらも村長から町長に格上げだあ！

高浜 おめでとうございます村長。いや町長！

村長 やめでぐれ町内会長、照れるべ。

高浜 いいじゃねすが町長、めででんすがら。

河東 ほんどにありがとなエリちゃん。

エリ おらはなんも。全部ヒトが色々考えでくれでおかげだ。

ヒト 村長、いや町長たちのアイデアあつてこそすよ。

村長 芭蕉でつちあげ作戦。こんなことでうまぐいぐどはな。

河東 芭蕉の教えなんてでだらめなのにな。

村長 なんの変哲もね俳句塾を使った過疎化防止の一手がこんなうまぐいぐどは。

エリは深くため息。

ヒト なした。

エリ なんだが、みんな騙してんのわりい気がして。

高浜 まあな。

河東 (申し訳なきそうにしつつも) なんだも、そうせねば未だに寂れた俳句塾だったべ。死んだ親父さんから継いだ俳句塾潰したぐねべ。

エリ だげど、本当はおらじゃなくて兄ちゃんが継ぐはずだったのに。

村長 そりゃあエリちゃんが選んだ道だ。兄ちゃん都会さ行がせだがつたんだべ？

エリ そうだげど。

河東 おら達で一生懸命考えで、ようやくたどり着いだ答えだべ。

エリ おら、芭蕉の子孫じゃねし。

村長 んだから、おめの母ちゃん、若い頃キャバクラで働いでたと

ぎ「芭蕉」って源氏名だったべ。んだがら芭蕉の子孫に間違いいねえ。塾生が勝手に「松尾芭蕉」の子孫だつて解釈してるだけだべ。

高浜 今考えるとひでえ源氏名だよな。

ヒト エリ、おめのお蔭でたくさんの人の心が癒されでんだ。千何人の人たちが、おめに心の救いを求めてんだ。だからみんなのために、もつと頑張るべ。

エリ うん……。

村長 いいこ言うな。

河東 んだども、こんなに都会の人間は救いを求めでんだな。

ヒト 都会の生活に殺されだぐねえ人が、逃げでくるんですよ。亡命と同じです。資本主義の当然の結果ですよ。

河東 ヒトおめ最近随分難しい言葉使うようになったな。

ヒト 勉強してますがら。

高浜 エリの兄ちゃん、ブイが都会さ出て教授になつたららしいんすよ。幼馴染が教授なつて焦つてんすよこいつ。

ヒト (突然声を荒らげて) 教授がなんだあ！ なんにも偉ぐね！ みんなの心を癒してるおら達の方が何千倍も偉えべ！

みんな、驚き、沈黙。

エリ んだな。偉えよヒトは。みんなの心を癒してな。

ヒト わりな。取り乱した。

村長 んだども、この調子なら「町」から「市」さ格上げんなんのも夢でもねがもしんねな。

高浜 んだな。「市」目指しましょう。よ、市長！

村長 照れる照れるう。へば、ヒトとエリちゃんには期待して
がらな。

エリとヒトを残してみんな「へば」と言って去っていく。

エリ やつてげる自信ねえよ。

ヒト 大丈夫だ。(エリの頭をなでて) おめは賢えがらよ。

エリ ありがとう。今までやつてこれれだのも全部ヒトのお蔭だ。

芭蕉の教え作つて、毎回おらの原稿も書いてくれで。

ヒト エリの努力あつてこそだ。

エリ おらに出来ることあつたらなんでも言つてけれ。なんでもす
るがら。

ヒト ん。

エリ (ヒトに寄つて) ヒト、ちよつといい？

ヒト なした。

エリ 言いでえことあんだけど、

ヒト なんだ。

エリ あんな、おらな、

カモメが現れる。

カモメ わあ、久しぶり。懐かしい。まだあつたんだね、この俳句

塾。昔より立派になたんじやない？

ヒト カモメか？ うわあ久しぶりだな。都会から戻つてきたの
が？

カモメ まあね。エリちゃんも久しぶり。

エリ どうも。

カモメ ちよつと落ち着いて、こつちの方で
研究しようと思つて。

ヒト そが。研究忙しかったのか。

カモメ 恋する暇もないくらい。

ヒト じゃあ結婚も？

カモメ それらしい相手すらいない。

ヒト そがそが。そういえば高校以来だからカモメと酒飲んだこと

ねがつたな。どうだ？

カモメ あ、いいね。エリちゃんもいく？

ヒト エリは疲れでるがら休んだ方がいいよ。

エリ ……ああ、んだな。

ヒト へば、行くべ。

ヒトとカモメは去っていく。

エリ おめが桜の花なら、おらは軒に咲ぐ栗の花。誰にも見つけで
もらえず、愛でてくれる軒の主人は初めがらいねえ。

世の人の 見付ぬ花や 軒の栗

●シーン3

三島が原稿を読んでいる。カモメもいる。

三島 「世の人の 見付ぬ花や 軒の栗」

カモメ お久しぶりです、先生。

三島 ああ、カモメくんか。久しぶり。東京に旅たつとき以来かな。

カモメ ええ。

三島 我が子が帰ってきたみたいだ。僕がこっちにきたのは、

カモメ 私が11歳のとき。

三島 小さい頃は度々僕について回ってた。

カモメ 先生がここに来たとき、とても知性的な人だなんて。

三島 懐かしいね。キミが旅立ってから、ここも少ししずつ変わってきている。

カモメ (三島の持つ原稿を見て) それは？

三島 誰かが書いた小説の原稿。俳句を散りばめた一大叙事詩。第

一章には幼い頃に出会った満天の星空や、遠い世界への旅立ちが印象深く書かれている。

「あらうみ 荒海や あまのがわ 佐渡によこたふ あまのがわ 天河」

カモメ あ。

三島 なに？

カモメ その句、あの人のお気に入りだった。

三島 あの人の？

カモメ 私の幼馴染。懐かしい。

三島 私が彼に出会った日も満天の星空だった気がする。あのお寺の裏山だ。

ブイが現れる。

夜。寺の裏山。

懐中電灯を持ったブイが現れる。

ブイ 「よ 夜ル ひそか 竊ニ げっか 虫は月下の うが 栗を穿ツ」。

夏と呼ぶには遅い季節、幽霊たちはもう別の世界に帰ってしまっただんどう。季節は死んでいき、死んだ季節はまだ生まれでくる。鳥も魚も涙も人も、死んではまだ生まれでぐるのだ。

三島の声 ブイくん。

ブイが振り向いて懐中電灯を向けると、懐中電灯に照らされる三島の顔。

ブイ わあ！

三島 そんなに驚かなくてもいいだろう。今日のお昼、少しだけあ

いさつしたね。

ブイ ひとことな。

三島 改めて、私は学者の三島。都会から来た。

ブイ 都会の先生がなににきだ？

三島 文学の研究。というのには建前で、都会の生活に嫌気がさして、しばらくこういう風情のあるところに住みたいと思って。

ブイ ござでなにしてるの？

三島 お寺の裏山に行っちゃいけないってお父さんに言われなかつた？

ブイ ヒトどカモメど三人で肝試しさ来だ。

三島 おじさんにはひとりに見えるけど？

ブイ はぐれだ。

三島 そうか。少しお話してもいいかな。

ブイ いいよ。

三島 おじさんは、ブイくんに興味があるんだ。なんだか村の他の子達とは違うものを感じてね。

ブイ はあ。

三島 きつとなにか特別なものを持っているんじゃないかと思うんだ。どうだろう？ あたってる？

ブイ これ、笑わねえできいでほしんだけど。

三島 笑わないよ。

ブイ おら、未来のことを覚えてんだ。

三島 未来を「覚えてる」？

ブイ うん。

三島 「未だ来ない」と書いて未来。覚えることができるのは「過ぎ去った」こと、過去のことだけだ。

ブイ でも、今から18年後。知らないお婆さんが、おらの大事な人を燃やしでる。そんな記憶があんだ。

三島 もしそれが本当に記憶なら、18年後の記憶じゃなくて、99億9999万9982年前の記憶かもしれない。

ブイ なに言ってるがわがんね。

三島 大人になったらわかるよ。

カモメが現れて、懐中電灯でブイを照らす。

カモメ ブイ？

ブイ カモメ？

カモメ よがった。どこ行ったがど思った。

ブイ ごめん。

カモメ 誰がど話しでだ？

ブイ うん。あれ？

三島はもういない。

カモメ なに？

ブイ なんでもね。ヒトは？

カモメ わがんね。ひどりで奥の方さ行っちゃった。もうひとりでウチさ帰ってつかもしんね。

ブイ カモメは、おらのこと変だど思う？

カモメ なに急に？

ブイ おら、未来のこと覚えてんだ。今から18年後、たぐさんの人が、たぐさんの人を殺してんだ。

カモメ 戦争ってこと？

ブイ わかんね。カモメの母ちゃんみでえな人も、殺されでだ気がすんだ。

カモメ そいなこと起こらんよ。おら達には負けだ財産があんだ。

よぐばっぱがそう言ってるべ。

ブイ なんだも覚えてんだ。

カモメ 変なの。

ブイ 変なのかな。

カモメ ブイは将来どうするの？

ブイ 俳句塾継ぐんだべな。

カモメ おら、将来都会さ行こうど思うんだ。

ブイ え？

カモメ 都会から先生来てだべ。おら、少し話したんだけど。すつ

げえ頭いんだ。おらもあんな風になりで。一緒にここ出で、都会さ行く。

ブイ 俳句塾つがねえど。

カモメ 真面目だな。(不意に上を見て) あ、見で。

ブイ あ。

見上げれば満天の星空。

音楽。

ブイ 「荒海や 佐渡によごだふ 天河」

季節は違えど、そのとき彼が見た星たちは、今ここに広がる景色よりも雄大だっだろうが。今ここで、おらはカモメと二人で、この空の下にいる。このときのおらは、言葉で言い表せない感覚に
なつた。

カモメ おらたち、いつまでこうして一緒にいられるべ。

ブイ 一時間がな。大人たちが探しに来るべ。

カモメ もっと長えよ。

ブイ 都会さ行っちゃったら7年。

カモメ もっと。

ブイ うまくいけば70年くれえかもな。

カモメ おらたちきつと、1000億年後も、2000億年後も、

3000億年後も一緒にいるよ。

ブイ とつくに死んでるべ。

カモメ はがねえな。あの星たちは生きてるがな。

ブイ わがんね。

カモメ 都会さ行く。おら、都会さ行ってもブイと一緒にがいい。

ブイ え？

ヒトが現れる。

ヒト あ、ここにいだ。

ブイ あ、ヒト。

ヒト どご行つてだんだ。怖かったべ。

ブイ おめが先行ぐがら。

ヒト おめえら、変なことしてねえべな。

カモメ 変なことつて？

ヒト だがらおめ、あんなことどが、こんなことだべ。

ブイ しでねえよ。

ヒト (ブイをつかんで) ほんどだべな！

ブイ なに興奮してんだ。

カモメ ヒト、ヒトは将来どうすんの？

ヒト 将来？ おらは将来王様になる。

カモメ 王様つてなに？ どこの国の？

ヒト 知らねえよ。おらは偉い人になんだ。(ブイに) おめは何になんだ？

ブイ 都会さ行く。

カモメ え？

ヒト は？ 俳句塾継ぐんじやねえのが？

ブイ でも行く。俳句塾はエリが継ぐべ。

カモメ おらも都会さ行く。

ヒト おめえら、やっぱりなんかあつだんだべ。

カモメ ないよ。ね？

ブイ うん。

また三島が現れる。二人が懐中電灯の明かりに照らされる。

三島 そうしてキミたちは大人になる道程で都会へ旅立つことになる。
なる。

カモメ え？

三島 キミは地元に残り王様になる道を歩んでいくだろう。

ヒト 王様になれんのか？

三島 そう、8年後、キミは王の道を。(カモメに)そしてキミは心の道を。

カモメ おらが？

ブイ おらは。

三島 言葉の道。旅路は違えど、キミたちは旅立つ。一月日は百代の過客にして、行きかふ年もまた旅人なり。」

ブイ 芭蕉が？

三島 そぞろ神に心を狂わされたか？

カモメ だがら旅立つんだ。

三島 「古人も多く旅に死せるあり。」だ。

ブイ 戻って来れるよ、芭蕉なら。

三島 それなら旅立ちの言葉を。

三人 「草の戸も すみかわ 住替る代ぞ よ ひなの家」

ロック調の音楽が入ってくる。

ロック・シンガーのコザキが現れる。

コザキ ようこそ眠らぬ街へ。ビンビン行こうぜえ！

歓声。そしてコザキの激しい歌。

コザキ 昔は…」と偉そうに語るジジイだの

「最近の若者は…」と嘆くババアだの

くだらねえ ケツを蹴り飛ばしてやれ

だせえ 古くせえ 頭のかてえ連中は 埋もれちまえ

俺たちの時代がやってくる クズどもを踏み台にして

時代を築いてやるぜ 俺たちの時代がやってくる

神様のつくったものさしなんか ぶっ壊してやろうぜ

さあ行こうぜ 俺たちが時代

コザキが歌い終わると歓声。

ブイの隣には、大学の同期・タミオがいる。

タミオ どうよ都会の生活は！

ブイ うああ！ 最高だあー！

タミオ 金はまだあるか？

ブイ おじさんに入學祝いでもらったあ！

タミオ いいええ！ もつと刺激のあるところ行っちゃおうぜ！

怪しげだが心躍るような音楽。

風俗の女・ハナが現れる。

ブイ うああ！

ハナがエロティックにブイの体に絡んでくる。

ブイ 都会、すんげえなあー！！

音楽が高まる中、暗転。

第二幕

●シーン4

コザキ邸。

コザキと妻・シマコがいる。

パーティーが行われている。

ブイが現れる。

コザキ おう、待ってたよ。ブイ。

ブイ 今日のライブ、最高でした。

コザキ 俺はいつだって最高さ。

ブイ シマコさんもお久しぶりです。

シマコ ええ、少し太ったんじゃない？

ブイ 幸せ太りですよ。

コザキ そうか、この前教授に就任したんだったな。

シマコ すごいわよね。まだ若いでしょう？

コザキ その若さで教授か。ロックだな。

ブイ 特例中の特例です。木寺先生という教授が僕に目をかけてくれて。

シマコ 才能あつてこそよ。作曲したり、小説書いたりもするんでしよう？

ブイ コザキさんの才能にはかないません。

コザキ ただ心から溢れ出る激情を言葉にしてるだけさ。そろそろ新曲ができるんだ。今度のは傑作だぜ。

ブイ それは楽しみです。私も今、ある論文を制作しています。

コザキ んーなんだったかな。

ブイ 言語学です。

コザキ そうそう。教養がねえから。

ブイ コザキさんのことを書こうと思うんです。

シマコ まあ。

コザキ 言語学の論文に俺が？

ブイ いかがです？

コザキ 最高にロックだ。

ブイ コザキさんの心から溢れ出る言葉。その言葉になぜ人々は感動するのか。私は今までの言語学を超えた新しい言語学の観点からそれを解釈したいと思っっているわけです。

コザキ よくわからねえが、ブイの心から溢れ出るその熱情、俺にはしつかり届いてるぜ。

ブイ 私の全人生をこの論文にかけました。この論文は私の人生そのものです。人類史上最高の傑作ですよ。完成したらお見せします。これからは私の新言語学が学会のスタンダードになりますよ。きつと学会がひっくり返ることでしょう。

全員去る。

木寺教授と学者たちがブイを囲む。

みんなひっくり返る。

ひとりが論文をブイの足元へ投げ置く。

学者1 なんですかこれは？

ブイ 新しい言語学です。

学者2 言語学がなんであるかわかっていますか？

ブイ 心から溢れ出た熱情、それが言葉というものになるのです。

学者3 それは学問ではないでしょう。

学者4 木寺さん、これがあなたの言っていた優秀な人材ですか。

木寺 いえその、

ブイ 学問には革新が必要です。

学者1 革新というのは発展を意味します。あなたのはただの退廃です。

学者2 学問のような口調で書かれているが、中身は魂だの、ロックだのという客観性のない言葉で流行りのミュージシャンを称賛しているだけ。

学者3 占いや霊能力と大差ありませんな。

ブイ 教授、言っやってってください。学問は常に新しくなければならぬ。古い知識にしがみついている者が学問の発展を妨げると。いつもおっしゃっていたじゃありませんか。

木寺 ブイくん、この論文、取り下げてくれないだろうか。

ブイ はい？

学者4 木寺さん、これは論文じゃない、ただの随筆ですよ。

木寺 なにかの間違いでしたと、その随筆を、この場で破り捨ててはくれないか。

ブイ 何をおっしゃるんです。私の新しい言語学で、学問に新しい道が開けるんです。

木寺 ブイくん！ これ以上私に恥をかかせないでくれ！

木寺教授は去っていく。

ブイ ……あ、え？

学者1 キミも帰りたまえ。

学者たちも去っていく。

ブイは去ろうとする学者たちになにかわめくが、相手にされない。

ブイ なぜですか。待つてください。新しい学問なのです。今までの言語学とは一線を画した傑作なんです。教授、木寺教授！戻ってきてください！ 教授！ 違うんです。これはなにかの間違いだ！ 教授！ 教授！

みんないなくなってしまった。

ひとり、落ちている論文を必死に拾い集めるブイ。

ブイ これだから頭の古い連中は。

頭痛がして、頭を押さえる。

ブイ 陰謀だ！ 俺の才能を恐れて、あいつら俺を陥れたんだ！

さらなる頭痛がくる。

ブイ あいつらは頭が固いから、コザキさんの熱情を受け止めきれないんだ。エセ学者の相手なんかしてられるか。言語学なんかクソくらえだ。音楽だ。言語は音楽と融合してはじめて魂が宿るんだ。論文なんかクソくらえ。音楽、そう音楽だ。俺は音楽を書く。音楽の傑作を。

ブイ、狂ったように紙に譜面をかいていく。

ブイ 流行りなんかじゃない。音楽には魂が宿るんだ。コザキさんの音楽は熱情が具現化した言葉。コザキさんの音楽には魂があるんだ。コザキさんの音楽には！

コザキが現れる。

ライブ会場。

コザキは歌う。

コザキ 素敵なキミのぬくもりに包まれて 永遠に眠りたいぜ

永遠に好きだぜ 永遠に愛するぜ

会いたいぜ 震えるぜ 永遠にキミのこと大事にするぜ

Why? どうしてこの恋はかなわない

Why? どうして僕じゃダメなのか

ありえないぜ 永遠のサヨナラ 永遠に forever

そのあまりにも大衆に媚びを売った歌に、ブイは絶句し、コザキのステージに駆け上がる。

ブイ なんだこれは。魂の叫びはどうしたんだ。私はこんな永遠にフォーエバーな歌は認めないぞ。この世界に永遠なんてものがあるか。

コザキ 大人になれよブイ。音楽は聴かれることなしには成立しない。大衆の聴きたい音楽をやる。これもまたロックだ。センキユ

ー！ フォーエバー！

拍手のなか、コザキは去っていく。

ひとり残されるブイ。

またひどい頭痛が襲ってくる。

苦しみながらも自分の書いた論文や譜面を破り捨てていく。

そこは砂漠の風景。

ブイ 「野ざらしを 心に風の しむ身かな」

そう詠んだ男は結局旅の途中で倒れ見向きもされず朽ち果て野良犬に食い散らかされることはなかった。実際に野ざらしになった男は、なおのこと風がしみるものだと教えてやりたいものだ。

タミオがいる。

タミオ 久しぶり。

ブイ え？

タミオ 大学卒業して以来だな。覚えてるか？ タミオ。大学に入りたての頃ライブとか風俗とか連れてったろ。

ブイ ああタミオか。久しぶり。

タミオ 全部見てたよ。

ブイ 全部？

タミオ 論文のことも、音楽のことも。

ブイ、しばらく自嘲的に笑う。

ブイ 俺はコザキのことを神だと思ってた。だが、あいつは人間的な、あまりにも人間的な男だった。そこいらの末人と同じ。

タミオ 末人？

ブイ 終わりの人。人として終わってるってことさ。ひたすらに安

楽を求め、食ってクソして寝る以外にはなんの能もない生き物。

だが、その安楽すら俺は手に入れられない。(息があがってくる)

この砂漠は暑すぎて息ができない。

タミオ、拍手する。

ブイは怪訝な表情でタミオを見る。

タミオ おめでとう。素晴らしいことだ。

ブイ は？

タミオ もつと耐えるんだ。今の世界は仮の世界。人間は死ぬと本当の世界にむかう。この世界で苦しめば苦しんだ分、死んだ次に素晴らしい世界が待っている。

ブイ この苦しみに意味があるのか。

タミオ そう。苦しまない人間は、次の世界で究極の苦しみが待っている。だから今のうちに苦しもう。そして耐えよう。キミは砂漠で重たい荷物を背負うラクダだ。

ブイ オアシスは。

タミオ 歩き続ければ見つけられる。だから、

ブイ それまでは耐えてみせる。オアシスにたどり着くその日まで。

ブイとタミオは去っていく。

俳句塾。ヒトは片手で頭を抱え目をつむって座っている。

エリ、高浜が沈黙して座っている。

そこに現れる町長（もと村長）と河東。

町長 ヒト、ヒト。

高浜 お静がに。

町長 んだども、こごとごと人口が増えるどころが減ってしまったるべ。

エリ 最近、また変な噂が流れ始めできますが。このあたりでがん患者が増えできただの奇形動物が増えできただの。

町長 おらあ、「町」から「市」に格上げしてえんだ。おらあ町長から市長になんだよお。

高浜 まあまあいったん落ち着いで。

町長 町内会長のクセに町長に命令すんのが。

高浜 いえ、そうではねぐ……。

川端が現れる。

川端 あの……。

高浜 あ、なした、みつちゃん？

川端 あ、町内会長さん。帽子忘れてしまつて。

河東 あ、ありか。（帽子を渡す）ほら。大事な話してるから。

町長 いや、いいべ。どうせだからみつちゃんにも考えてもらおうべ。

みつちゃん賢えしよ。

川端 なに？

町長 風評被害だ。今さらなってまだ根も葉もねえ噂が立つて、この町の人口減つてきでんだ。このままじゃ「町」から「市」に格上げできねんだ。おらも町長から市長になれねんだ。なんかいい案ねえが？

川端 急に言われでも。

ヒトが口を開く。

ヒト やっぱ、季語つでのがダメなんでねえがな。

少し沈黙。

川端 え？

ヒト 季語。

高浜 どういうことだ？

ヒト 実際、塾生たちもこの季語を句の中に入れるのを一番苦労しています。

高浜 季語が必要ねえつて？

町長 お、確かに。おらも季語つてまどろっこしいと思つてだんだ。

高浜 季語がねがつたら俳句じゃねえべ。

ヒト 町内会長さん、芭蕉の教え言つてみてください。

高浜 は？

ヒト いいですがら。

高浜 ……。

エリ ひとづ、俳聖・芭蕉、およびその子孫を尊ぶべし。

河東 ひとづ、松のことは松に習え、すなわち個人的な観念を捨て対象と一体化せよ。

町長 ひとづ、意見が分かれる場合は民主的な方法により決定せよ。

ヒト どこに俳句は季語がなければならねえと書いてます？

高浜 書いてねぐでも当然でしょう。昔から俳句は季語を使うと決まってるんだ。

ヒト そうやって昔のルールにこだわってるから時代に取り残されるんです。時代に合わせねば。そうしねえどどんん人が離れでいぎます。

町長 そりはダメだ。おらあ市長になんだ。

高浜 そりは俳句とは言わね。

ヒト ですから、そいは町内会長さんがそう解釈してるだけです。季語がいらねえって解釈もあるんですよ。時代に沿って解釈変えんのは当然です。

高浜 なんだも、

河東 へば、季語なしの五七五どいうわけだな。

町長 そりは川柳でねが。川柳は俳句でねえべ。

河東 そうすよね。

ヒト あどあの五七五、あれがダメだと思んです。たった17文字。少なくともねえですが？ 17文字じゃ書いてえこと言えねえです。ねえ？

河東 なんだも、そうすると？

ヒト 七七七五にしましょう。七七七五季語なし俳句。26文字もある。

町長 そり面白えな。そりならたぐさん言えつしな。さすがヒトだ。

高浜 そりは都々逸では？

町長 ……ん？

河東 都々逸というのは？

高浜 七七七五の。

「散切り頭を 叩いでみれば 文明開化の 音がする」

河東 それを都々逸って言うのが？

高浜 んだ。

沈黙。

ヒト ン、なに言ってるんですが？ 七七七五季語なし俳句は都々逸

じゃねえでしょ。な？ エリ。

エリ 都々逸じゃね。

町長 わがんねども、たぶん違うな。

河東 違えすな。

高浜 なんだも、季語もねし、五七五でもねのなら、もう俳句とは言わねす。

ヒト ですから芭蕉の教えのどこに俳句は五七五じゃなげりやいけねえって書いてんですが？

高浜 そもそも芭蕉の教えなんてでたらめじゃねすが。

河東 町内会長！ みっちゃんの前だべ！ そりに町内会長だつて一緒に作ったべ。芭蕉の教えは絶対だ。

高浜 なんだも。

町長 みっちゃんは、こり俳句だと思うよな？

川端 え？ ああ、常識で考えたら俳句じゃねえような気もすんだげど。

ヒト そら常識はそうだ。んだども今まで常識だと思ってきたことを疑うことこそ重要だ。なぜなら常識は誰かが都合のいいように作り出したものだからだ。わがるが？

川端 はあ、なんとねぐ。

町長 みつちゃんも賢いな。ヒトの言ったことはすぐ理解できる。

川端 ありがとうございます。

河東 頭のかてえ町内会長とは雲泥の差ですね。

町長 へば、明日つから七七七五季語なし俳句で行くべ。あ、体動かしながら声出すと健康にいいってテレビで言っただよ。みんな体動かしながら俳句を読めば、一体感も出るんでねがな。マイムマイムみてえな。小学校の時の宿泊研修みてえで楽しくねえが？ みんなでお泊りとがしで、ご飯作って。

河東 それいいすね。

高浜 いやそりは、

町長 バーンと広告出そう、駅のホームとがにき、バーンと。

河東 キヤツチコピーとがあるどいいすね。

町長 「大人の宿泊研修。」

河東 楽しそうすね！

高浜 いかかわしぐねすが？

エリ ホームページとか作ったらいんでねがな？

河東 おおそうだ、なんで気付かねがったんだべ。

町長 みつちゃん、そういうの得意とか言っただねがったが？

川端 え？ ああ一応少し。

エリ (川端を抱きしめて) ありがとうみつちゃん。一緒に頑張ろう。

川端 あ、はい。

高浜 いやあの、

町長 よし、解散！ さっそく準備に取りかがるべ。

ヒトとエリ以外は去る。

エリ 大丈夫がな？ 七七七五季語なし俳句なんて。

ヒト わかんねえけど、やってみるしかね。

エリ ヒト、最近疲れでねが。

ヒト 塾生が増えでいがねがら。

エリ そんなに気にしねぐでもいんでねがな。

ヒト これじゃダメなんだよ！ おめの兄貴は教授んなつてよ。おらはあいつより偉くならねばいげねんだ！

エリ ごめんなさい。怒らせるつもりじゃねぐで。なにか、おらにできることあればど思っつて。

ヒト わりな、急に怒つて。

エリ なにかできることねえが。できることならなんでもするがら。

ヒト ……へば、ひとつお願いしてもいいがな。

エリ なに？

ヒト エリ、そろそろ結婚とか考える年じゃねがな。

エリ え？ ああ、まあ、そだな。

ヒト そろそろ結婚した方がいんでねが。

エリ だけど、そんな急に。相手もいいねし。

ヒト、エリの肩に両手を置く。

ヒト 町長の息子と結婚してくれねが。

エリ え？

ヒト おらにはもつと力が必要なんだ。ブイなんかに負けでらんねんだ。

エリ なんだも、町長の息子って、気難しいらしいし、きつとおらどなんか結婚してくれねえよ。

ヒト 頼む。町の繁栄のためだ。エリ。個人的な欲は捨てんだ。おめは芭蕉の教え、守るべな？ 芭蕉の子孫だもんな？

エリ おら、芭蕉の子孫じゃね。

ヒト、エリの頭をつかむ。

ヒト おめは芭蕉の子孫だ。そう決まったべ。

エリ ……わり、おら芭蕉の子孫だ。

ヒト 芭蕉の子孫が芭蕉の教えに背いたら、どうなるかわかってるべな。

エリ ……。

ヒト 個人的な欲は捨てんだ。な？ 無理にとは言わね。なんだも、考えるだけ考えてくれねか。

エリ なんだな。考える。

カモメが現れる。

カモメ よ、元気？

ヒト おおカモメ、なした？

カモメ 近く通ったから覗いただけ。

ヒト そが。どうだ？ 一杯。

カモメ お、いいよ。

ヒト そが、じゃあ行くべ。

ヒトは先に行き、カモメもいこうとする。

エリ カモメさん。

カモメ ん？

エリ カモメさんが勉強してだ、あの、

カモメ 心理学？

エリ なんだ。その、心理学、……おらにも教えてくれねが？

カモメ え？

エリは去る。

三島がいる。

カモメ 私、マズいことをしたんじゃないかと思うの。

三島 エリちゃんに教えたことかい。

カモメ 近頃あの俳句塾はおかしい気がする。

三島 歴史が動き始めている。

カモメ いい方向？ 悪い方向？

三島 歴史は歴史になってからでなければ評価できない。いいか悪いかは未来の人が決めること。

カモメ なにかあったら止めないと。

三島 私もスパイを送り込んでいる。

カモメ 誰？

三島 川端のみつちやんだ。

カモメ みつちやんが？

三島 私の助手になりたいと言っていたので手伝ってもらっている。なにかあればその都度報告してもらってる。

カモメ でもどうしてスパイ？

三島 文学の研究さ。

カモメ スパイが文学なの？

三島 ただの文学じゃない。人の文学。

カモメ え？

三島 人文学だよ。なにかあつたら川端を頼るといい。くれぐれも

よろしく。

カモメ ええ。

●シーン6

ブイと、友人のタミオがやってくる。

ブイは酔っていて、バランスを崩して転ぶ。

ブイ 少し飲みすぎたかもしれない。

タミオ 大丈夫か？

ブイ ああ。最近頭痛がひどいんだ。

タミオ その調子だ。もっと苦しもう。

ブイ 大学での俺の講義はそりゃあ人気だったもんだ。毎回立ち見が出るほどだった。あの論文を発表して以来、教室に来るのはせいぜい2、3人。講義をするのが苦痛で仕方ない。

タミオ 今は耐えるんだ。

ブイ それにあのコザキとかいうエセ音楽家はますます世間にも

てはやされている。あんな永遠にフォーエバーな末人の音楽を崇めていく世間の人間がはじめに思えてならない。

タミオ 気にするな。あいつは死後の世界、激しい苦しみに遭い続ける。

ブイ なあタミオ、俺はつくづく思った。人間ってのは意味もなく死んでくもんだって。

タミオ 哲学か？

ブイ 大きな災害があれば、何千人、何万人が意味もなく死ぬ。どんな善人だろうがどんな悪人だろうがみな等しく死ぬ。

タミオ そりゃそうさ。

ブイ 世の中で成功していると言われている人間がいる。だけどそこに一切の価値はない。人間は死ぬから。ヤツらはひたすらに無価値なものを作り出していく。少しも偉くはない。そしてヤツらは死後に苦しみの世界へ行く。苦しみに耐えている俺の方がずっと価値がある。俺は素晴らしい世界へ行けるからだ。

ブイに激しい頭痛。

タミオ そうだ。もっと苦しめ。そしてもっと耐えるんだ。

ブイ ああ素晴らしい苦しみだ。死んだらどんな素晴らしい世界へ行けるのか。苦しもう。俺はもっと苦しむ。死ぬまで苦しみ続けるんだ。

三島が現れる。

三島 あれ、ブイくん？

ブイ あ？

三島 ああ久しぶり、覚えてる？ 三島だよ。

ブイ ああ久しぶりですね先生。田舎に飽きたんですか。

三島 ちよつとこつちに戻ってきただけさ。

ブイ、咳き込む。

ブイ すみません、少し体調が悪くて。

また咳き込む。

三島 あ、

ブイ なんですか？

三島 いや、前にもこんな風にキミと出会って、キミの咳をきいた気がして。

ブイ 気のせいでしょう。こつちで先生と会うのは初めてです。

三島 ああそうだ、ちよつど1000億年前だ。

ブイ (笑う) まだ宇宙すら生まれてませんよ。

三島 いや、あつたんだよ。もう消滅したけれど。

ブイ ……？

三島 ブイクン、人間は死んだらどうなると思う？

ブイ 次の世界に行きます。

三島 次の世界？

ブイ この世界で苦しんだ人間は素晴らしい世界へ。この世界で成
功した人間は苦しみの世界へ。

三島 なるほど。ほかの可能性も考えられないだろうか。

ブイ 別の生き物として再びこの世に生まれてくる。という説もあり
ますね。そのときも、苦しんだ人間は、よりよい生き物に生ま
れてくるはずですよ。

三島 ほかは？

ブイ 死んだらそれっきりっていう説もありますね。僕は信じませ
んが。

三島 どれでもないよ。

ブイ …… (笑つて) そりゃ面白いですね。ほかになにがあるつて
言うんですか？

三島 キミが死んだら、キミはまたキミとして生まれてくる。

ブイ ははは、そりゃ面白いですね。

三島 キミはまたあの片田舎に生まれ、またあの田舎を飛び出し都
会に出て、またあの学者たちに論文をこきおろされ、またこの場
所で私と出会い咳込む。今までそうしてきたように。そしてこれ
からもずっと。

ブイ そんなことありえませんかよ。

三島 物理学的に考えれば、全く同じ状態で全く同じ実験をすれば
全く同じ結果が出る。

ブイ そりゃ当然です。

三島 宇宙はどうだろう。

ブイ え？

三島 なにもない状態から宇宙が誕生した。そしてきつと、いつか
宇宙は消滅する。するとまたなにもない状態になる。つまり、宇
宙の最初と最後は全く同じ状態だ。

ブイ ……。

三島 まったく同じ状態からは、まったく同じ結論が出る。つまり、

なにもない状態から、また宇宙が生まれる。そして宇宙の消滅まで、全てが寸分たがわず繰り返される。宇宙は1000億年周期で誕生と消滅を繰り返している。もちろんキミも含めてね。

ブイ デタラメです。根拠がありません。

三島 覚えているかい？ キミが昔、18年後のことを「覚えている」と言っていたこと。

ブイ え？

三島 未だ来ないと書いて未来。覚えていられるのは過ぎ去ったこと、つまりは過去のこと。キミが覚えていたのは、18年後のことじゃない。999億999万9982年前のこと。

ブイ あ、あ、

三島 つまり、キミはまたキミとして生まれてくる。

ブイ じゃあ僕はなんの意味があつて苦しんでいるんです。

三島 意味なんかないよ。キミの砂漠にオアシスはない。これはキミの100万回目の人生。キミはきつと吐き気を催すだろう。今までそうだったように。そして、これからもずっと。

ブイ、吐き気を催す。

三島 ほらね。

ブイ この人生を永遠に繰り返す。

三島 キミに別の人生は用意されていない。キミは自分の人生から逃げられない。

ブイ ああ！ この苦しみを永遠に繰り返す！ この絶望を永遠に繰り返す！

ブイ、吐く。

三島 キミは無力。今まで通り歯ぎしりをし続けるかい？ 歯がボロボロになる前に戻っておいで。キミの原初の地へ。きつとそこにキミの答えがあるから。

ブイ、起き上がり、息を整える。

ぱつと口を押さえ、また息を整える。

ブイ ……吐き気……。

●シーン7

俳句塾。

塾生たちはそれぞれ七七五季語なし俳句を唱えながら、寝たり立ったり妙なポーズやダンスをしている。その光景はなにかの儀式のようである。

それを見ているエリとヒト、町長。指導している河東と高浜。記者がその様子を見ている。

ヒト よし、今日はここまで。庵に戻っていいぞ。

塾生たち はい、ありがとうございます！

記者 (帰ろうとしている塾生に) すみません、お話いいですか？

塾生2 はい。

記者 どうしてこの松尾俳句塾に入ったのですか？

塾生2 都会の生活に疲れてしまって。個人を捨てて自然に一体化

することで、今まで味わえなかったような気持ちになるんです。

塾生3　なんか、自分の居場所を見つけられたっていう感じがしますよね。

塾生2　そうそう。それ。居場所。

記者　さっきの変な踊り、俳句とは関係なさそうに見えますが。

塾生2　変じゃありません！　あれも俳聖・芭蕉の教えです！

塾生3　個人を捨てあるがままの世界を受け入れるために精神を引き上げています！

河東　そう怒らずに。精神を引き上げたことのない方にはわからない話です。記者さん、あとは我々がお話しますから。

記者　ええと。

河東　会計の河東です。

記者　失礼しました。

川端　おら、残ってもいいですが？

河東　おう、熱心だな。聞いていきなければ聞いてけ。

塾生たちは去っていく。

記者　それではいろいろとお伺いしてもよろしいでしょうか？

町長　いいよ。

記者　この塾生の方々は、みな住み込みですか？

町長　んだね。なんかいいでしょう小学校のときの宿泊研修みでえで。

記者　さつきやっていたのはなんででしょう？

町長　あれは精神統一ね。個人の感情を捨て自然へど一体化？　だっけ？

河東　自然へと一体化しているんです。

記者　俳句塾なのに、都々逸を唱えていませんか？

ヒト　あれは都々逸じゃなくて、七七七五季語なし俳句というれっきとした俳句ですね。

記者　それを都々逸というんじゃ。

町長　松のこどは松に習え。意味わかる？

記者　いえ。

町長　これは芭蕉による個人主義批判？　だっけ？

河東　芭蕉による個人主義批判、と解釈することができます。

ヒト　資本主義という個人主義が押し進められた結果、世界的な大恐慌が起きました。そこで我々人間は気づかなければならないんです。これからの時代、我々が求めるべきは経済的な豊かさではなく精神的な豊かさ。

町長　そう、それを言いたがったわけだけど。わかる？

エリ　俳聖・芭蕉はそれをいち早く見抜いていたわけです。

河東　つまり、時代が俳聖・芭蕉を求めでいるど、そういうわけですね。

エリ　この塾生はほとんどが住み込みでして、我々が「芭蕉の庵」と呼んでいる建物で共同生活を送っています。

記者　共同生活ですか？

町長　大人の宿泊研修ね。

エリ　私たちは自分の物を持たないんです。

記者　どういうことですか？

エリ　すべてを共有しているんです。服も、車も、食べ物も、すべてが共有なんです。

町長　独り占めできないってこどね。

河東 畑も耕して、自給自足を実現しています。

町長 つまり、この国の経済から独立しているわけね。経済的な豊がさは捨てたわけ。だって、いくら金があったって、いくら物を持つてたって、人は幸せになれないってわかってきたでしょう。

問題は精神なの精神。精神の豊かさね。ね？

河東 自然と一体化することにより精神が豊かになるわけですね。

記者 副塾長さん、先日、町長さんの指名により副町長に就任したそうですね。

ヒト ええ。

記者 それに塾長は町長さんの息子さんと結婚したそうですね。

エリ そうですね。

記者 そして町長さんはこの松尾俳句塾の会長になったそうじゃないですか。

町長 なにが問題が？

記者 この俳句塾、町から多額の補助金を受け取っていると聞いています。これが政教分離の法則に反するという町民の指摘もあります。これが。

町長 政教分離は宗教の話。俳句塾は宗教じゃないでしょ。おめ勉強不足だな。

記者 しかし町長や副町長のかかわる団体に多額の補助金というのはおかしいのではないかと町民の声もあります。

町長 例えば町内会って、町がら補助金もらってるよな。おめの理屈だど町内会に属してる人間は政治に関われなくなるよな。それおがしいと思わねが？

記者 町内会は別でしょう。私がある町民に聞いたところによりますと、

町長 町民町民って誰だその文句言ってる町民は。おめえらが選挙で選んだ町議会の議員が決定したことだ。文句あんなら署名集めてリコールすればいいべ。それがルールだべ。

記者 みなさまがそういう態度であることはわかりました。

町長 キミあれが、ずっと都会暮らし？

記者 ええ、そうですね。

河東 ああ、

町長 毒されでるな。資本主義と個人主義に侵されて精神が汚れている。おめもこの俳句塾さ入ってみるどいい。ね？

河東 松のことは松に習え。我々とともに大人の宿泊研修をしましょう。

記者 失礼します。

記者が出ていこうとすると、新人の塾生が戻ってくる。

新人 あ、行かれますか。お送りしますか。

記者は無視して去っていく。

ヒト あれが精神の弱い者。いわば精神弱者です。

町長 井の中の蛙どもいうな。七七七五季語なし俳句で言えば

「井戸の蛙が 空うち眺め 四角なものだど 議論する」だな。

高浜 どうした、忘れ物か？

新人 いえ、居残りをしたくて。

町長 偉えな。

河東 偉いですね。

新人 僕、うまく自然と一体化できていない気がするんです。なに
かが邪魔をするんです。精神が弱いからなんでしょうか。眠れな
い日が続いています。吐き気もおさまらないんです。

町長 精神を引き上げれば全て解決すると思っただげどな。

河東 大丈夫。訓練をつづければできるようになるから。やってみ
なさい。

新人、七七五季語なし俳句を唱えながら、寝たり、立ったり、ポーズをと
ったり、ダンスしたり。

河東が指導する。

町長 そういえば、ブイのやつ、帰ってきたんだっけな。

エリ 昨日突然。ずいぶん具合悪そう。都会でひどい目にあつて
きたみたいなんです。なんとがしてあげねえど。

川端 エリさん、昔っから兄ちゃんっ子でしたよね。

エリ 一緒に暮らせるのは素直に嬉しいけど。帰ってくるのに、カ
モメカモメって、カモメさんの思い出話ばかり。おらに会っ
てもちっとも嬉しそうじゃねえ。

新人に異変が生じる。

叫びだし、しばらく痙攣している。

川端 え？ え？

河東 ああ、よくあるんだ。精神を侵しに来る毒と戦っているんだ。
これ乗り越えて、精神は一つ上の段階に引き上げられる。

新人、突然動きが止まる。

みな、様子を見ている。ずっと沈黙している。

高浜 あれ？ あれあれ？

河東 おい、大丈夫だぞ。お前は毒を制した。おめでと、精神が
引き上げられたんだ。もう目を開けていいぞ。なにか話せるか？

新人は黙ったまま。

河東、新人の脈をはかる。

河東 あ、あの、脈がないようなんです。

沈黙。

※無料版はここまでです。ご覧くださりありがとうございます。
全編はクラック芸術堂の販売ページ(左のURL)から購入でき
ます。ありがとうございます。

<http://www.clark-artcompany.com/public>

あとがき

ここ最近、あまり社会というものを描いてこなかったなという思いから、また再び社会というものを描いてみようと思った。5年前に書いた『もういちど』という作品を下敷きに、社会的な部分を深めて膨らませて書きました。人が集まると社会が生まれる。社会が生まれるとルールが生まれる。政治が生まれる。政治において注意しなければならないのは、誰かが力を持ちすぎるからだ。その人の考えが正しいうちにはいいが、間違っているときに止めることができなくなってしまう（もちろん、なにが正しくてなにが間違っているかは、あとになってわかることかもしれない）。

科学やなんかが発達して、どうやら神様という存在はいらないということがわかってきた。そうすると、今までは神様の教えを基準に行動すればよかったものの、神様が死んだ今、行動の価値基準を人間は失ってしまった。日本の戦後は、みんなで復興を目指した。それから、たくさん稼いでたくさん消費することを目指した。いい大学を出ていい会社に入れば、それで人生は勝ちだった。しかしその価値基準も崩れた。みんなが目指すべき目標は失われた。僕たちにはなにか新しい価値基準が必要になる。方法はふたつある。ひとつは新しい神様をつくること。何者かを神様にして、その神様の言うことに従うこと。もうひとつは、自分自身で価値基準を創造すること。自分自身が自分の神様になる、ということかもしれない。だが多くの人はそんなことはできない。自分に自信がないし、不安だからだ。誰かが作った価値基準に乗っかる方が安心だし、その価値基準が間違っているも自分で責任を取る必要がない。神様がいなくなった今、多くの人々が新しい神様を欲しているのかもしれない。だが、これだけは忘れないようにしなければいけない。「神様だつて間違っていることがある」ということだ。

2016年1月21日(木) 小佐部明広

《上演記録》

劇団アトリエ第19回公演『もういちど く蛙飛びこむ水の音く』

【キャスト】

ブイ	有田哲 (劇団アトリエ)
カモメ	塚本奈緒美
ヒト	倅田直機 (実験演劇集団 風蝕異人街 / 劇団 SON'S SUN)
エリ	脇田唯 (POST)
村長	伊達昌俊 (劇団アトリエ)
高浜	種田基希 (北星学園大学演劇サークル)
河東	高橋寿樹 (ゆりいか演劇塾)
ユザキ / 新人	若月篤 (ゆりいか演劇塾)
シマコ / 記者	田邊幸代 (北海学園大学演劇研究会 / ゆりいか演劇塾)
三島	信山E紘希 (座・れら)
川端 / ハナ	新谷菜摘
タミオ	長枝航輝 (劇団うみねこ / ゆりいか演劇塾)
塾生たち / 学者たち	牧野あすか 増田駿亮 大谷早生 (劇団ロクデナシ / 劇団うみねこ) 佐藤みきと (座・れら) 中村雷太

【スタッフ】

演出・脚本	小佐部明広
舞台監督	井上航一
舞台	米沢春花 (劇団 fireworks)
照明	山本雄飛 (劇団・木製ボイジャー14号)
音楽	山崎耕佑 (劇団 fireworks)

音響 小佐部明広

衣装 丹野早紀 松島みなみ

小道具 蝦名里美 (COLORE)

脚本アシスト ヤヨイ (ゆりいか演劇塾)

演出助手 牧野あすか

宣伝美術 八十嶋悠介 (TBGN./マイペース)

制作 丹野早紀 山木眞綾

【日程】

2016年3月17日 (木) 19時半 18日 (金) 19時半
19日 (土) 14時/19時
20日 (日) 14時/19時
21日 (月) 12時/16時

【場所】

ターミナルプラザことにPATOS

【料金】

一般前売 2000円 DM会員前売 1800円
25歳以下前売 1500円 高校生以下前売 500円
当日券各500円増し/再観 1000円

※実際の上演内容と一部異なる場合があります。ご了承ください。

2016年3月15日 第1刷制作

2017年10月4日 第2刷制作

『もういちどく蛙飛びこむ水の音』の上演について』

「一般前売入場料2000円未満」または「公演予算100万円以下」の
場合は、脚本使用料は**無料**です。それ以外の場合は、協議の上、総予算の
3%程度を上演許可料とします。上演のお問い合わせはクラアク芸術堂企画
運営委員会まで。

【クラアク芸術堂企画運営委員会】

clark.artcompany@gmail.com